三

磐音が蘭学塾に飛び込んだとき、蘭医の筆峰神仙らまだ診療所にいて、何事か議論をしていた様子だ。

玄関先で応対した若い医学生は、唐人を両腕に抱えた磐音をてきぱきと診療部屋に導き、

「怪我人にございます」

と叫んだ。医学生のあとから入ってきた磐音を見て、

「坂崎さん、どうした！」

叫んだのは淳庵だ。

「今、そこで唐人たちに襲われました。仕方なく抜き合わせて斬りつけました。ご迷惑とは存じますが治療をお願いします」

磐音の言葉に、初老の人物を中心に蘭方医たちは手早く動いていた。

長衣を切り裂いて、磐音が与えた傷の具合を診断したのは、神仙と思える初老の人物だ。

「傷口を洗って縫合手術じゃな。両伯、そなたが経験を積むにはちょうどよき機会じゃ。そなたに縫合を任す」

神仙が紅顔の医学生に命じた。両伯は玄関先に磐音を迎えた人物だ。

「はっ、はい」

神仙が介添えに回った。

医者のもとに運ばれてきたというのは分かっているらしく、唐人は目を瞑ってじっとしていた。

「坂崎さんの行く手には風雲が付きまといますね」

手伝うつもりの淳庵も袖を捲りながら言いかけた。

「中川さん、初めての長崎ゆえ知り合いはございません。襲われた理由を訊こうとしたのですが、言葉が通じませんでした」

それを聞いた両伯の口から異国の言葉が吐かれた。

唐人が目を開いて、顔を横に振った。すると両伯が手術をしようとした手を止めて、さらに激しい言葉を投げた。

唐人の顔が歪み、短い言葉が告げられた。

「浦五島町の西国屋という者をご存じですか」

両伯が再び手術の用意をしながら、磐音に言いかけた。

磐音は豊後関前藩の御用商人の特権を奪われた西国屋次太夫らが、長崎の出店に再起を託したことを忘れていた。

「坂崎さん、手術にさほどの時間はかかりますまい。しばらくあちらでお待ちください」

淳庵が言い、手術が始まった。

半刻も過ぎた頃、神仙らしい人物と淳庵が磐音の待つ部屋に入ってきた。

部屋は南蛮などの書物がうずたかく積まれた書斎だった。

手術は無事に終わったと言った淳庵が、

「坂崎さん、当家の主の筆峰神仙先生です」

と神仙を紹介した。

「坂崎磐音と申します」

磐音は自ら名乗ると、突然怪我人を担ぎ込んだ非礼を詫びた。

「医者なれば、かようなことは日常茶飯事でな」

神仙がのどかに応じた。

磐音は神仙のもとに淳庵ら蘭方医たちが日本各地から集まってくるというのを、一目で理解した。神仙の鷹揚とした人柄と、豊かな蘭学の知識と経験を求めてのことだろう。

「坂崎さん、あなたのことは先ほど先生にお話ししたばかりです。明日にもお呼びしようと思っていましたが、折りも折り、今宵ではどうです」

「重ね重ね申し訳ございません」

と頭を下げた磐音に淳庵が、

「坂崎さんから神仙先生に事情を話して、相談なされては」

と言った。ものを頼もうというのだ、当然の礼儀だった。

頷きながら、磐音は即座に肚を固めた。

「それがし、豊後関前藩の家臣にございました……」

と身分を明かした磐音は、日見峠で淳庵の話したよりも詳しく、藩を抜けた理由から長崎に来た理由を告げた。

二人は、磐音が友らと相戦わされた背景にそのような黒い企みがあったことや、関前藩が陥った窮乏にしばし嘆息して言葉もなかった。

「……なんと、関前藩の国家老と長崎に出店を持つ西国屋次太夫が組んで、藩を壟断してきたのか」

神仙が呆れ、淳庵が、

「聞けば聞くほど奈緒どのが哀れじゃ。先生、なんとか力になってくださいませぬか」

と神仙に頼んだ。

神仙ははてという顔で考え込み、言い出した。

「坂崎どの、淳庵どの、丸山は天正以来の遊郭でな、妓楼七十余軒がしっかりした、独自の決まりごとをきめておる土地じゃ。その中でも望海楼は、丸山一格式が高く、一見の客など座敷に上げぬ楼閣じゃ。仲介の労はとるが、最後に決め手になるのは金じゃな」

「金、ですか」

と磐音の懐具合を薄々承知の淳庵が溜め息をついた。

「神仙先生、いかほど身請けの金が要りましょうか」

「女衒が関前で払った金が百両か。丸山では、おそらく倍の値で望海楼に渡していよう。となると、少なく見積もって掛かりは三百、奈緒どのの器量次第では四百両は言い出すやも知れぬ」

「よ、四百両にございますか。それは無理だ……」

淳庵が口をあんぐりと開けて、絶句した。

「いや、金策の目処がないこともない」

磐音がのどかに答えた。

「神仙先生、西国屋は土地の者ではございませぬな」

と言い出した。神仙は頷くと。

「長崎は幕府直轄の地にござれば、長崎奉行どのが江戸から赴任なされて、統治されておる。ただ今の奉行は、新見加賀守じゃ。だが、長崎を実際動かしておられるのは、長崎町年寄と、長崎代官を頭分とする地役人二千余人の町人衆じゃ。この者たちが長崎会所を設けて、南蛮、唐人貿易から長崎の町政までを仕切っておる。むろん、長崎会所を監督なされるのは、長崎奉行じゃ。旗本衆から選抜される奉行は数年置きに代わるが、異国相手の貿易の窓口は、確固として長崎会所が取り締まってきた。これらの交易は官許のものが主じゃ。ところが長崎の交易は、江戸が許した船だけではない」

「密貿易と申されますか」

「簡単に申せばそうなる。当地では、薩摩藩をはじめ、西国大名諸家が長崎屋敷を置いて、大なり小なり貿易に従事しておる。そなたの関前藩は、西国屋次太夫を窓口に商いを続けていたのであろうな」

磐音が頷いた。

「そなたの問にまだ答えておらぬな。西国屋次太夫は長崎の者ではない、地役人ではないということじゃ。私の推量では、官商船、十二家額船以外の交易船とつながりを持つ商人ということだろう」

「官商船、十二家額船以外の貿易船とは、いかなるものにございますか」

「さよう、長崎に長崎会所が組織されているように、唐人貿易には幕府が許した官商の范氏らとそれに準じる十二家の額商（銅貿易商人）があって、これらが所有する官商人船と十二家額船が長崎交易を独占してきた。ところが、薩摩や西国屋たちが取引をする相手は、広東船と呼ばれる官許の船とは、別の船なのじゃ」

磐音はおおよそのことが呑み込めた。

西国屋次太夫は、豊後関前藩の御用商人の特権を剥奪されて、第二の関前藩を探したが、探している最中と推測された。

「よしんば、西国屋の商いが滞ったり、潰れたりしても、長崎会所や地役人方に迷惑は掛かりませぬな」

「西国屋のような店はいくらもある。長崎はそのような輩と利用し利用されつつ生きてきたが、潰れて喜びさえすれ、長崎会所に迷惑がかかると思えぬな」

磐音が頷いた。

「坂崎さん、あなたは西国屋に奈緒どのの身請けの金を出させようというのですか」

「はい」

「相手は、唐人のならず者を雇って襲わせたような商人ですよ。簡単に出しますかね」

「奈緒どのが身売りをしなければならなくなった因は、国家老と西国屋次太夫の関前藩専断にございます。幼馴染の友二人を失い、小林家、河出家の二家が取り潰しにあったのは、すべてこの二人のせいです。国家老は、自裁なされた。西国屋は確かに文六の悪業を裁きの場で話すことで、関前藩を出ることを許されました」

「ところが偶然にも長崎で見かけた坂崎さんを唐人に頼んで襲わせ、また新たな悪さを働いたというわけですね」

淳庵が首肯し、磐音が頷いた。

「それがしが無心に参っても、それなりの理屈はつきます」

心持ちに添わないことは己自身が一番承知していた。

だが、他に途はなかった。

磐音は自らの気持ちに逆らって言い切った。

「そのような悪商人が何百両もだすとは思えんがなあ」

淳庵が首を捻った。

「他に手立てはありません。それに今日の唐人の治療代もお支払いせねばなりません」

と答えた磐音は、神仙を向いた。

「神仙先生、一両日中に金を工面します。そのときは、望海楼にお連れいただけますか」

「それは承知した。唐人の手術代などどうでもよいが……」

と答えた神仙の顔には、金の工面がつくとは思えぬと書いてあった。

翌日の昼前、磐音は浦五島町の西国屋次太夫の店先に立っていた。

店は角地にあり、海を向いた表の間口は六間ほどで、荷が忙しく出入りしてなかなかの繁盛と見えた。

「ごめん」

磐音が秋の日差しを浴びてのどかに店に入ると、帳場格子の向こうで番頭の清蔵が呆然と磐音を見た。

「そ、そなた様は」

「番頭どの、知らぬ仲ではなし、そのような顔をせずともよいではないか」

「何の用でございますな。西国屋は、もはや豊後関前藩とはかかわりが切れましたぞ」

「それがしの手の中に関東船の水夫の嘉至福と申す若者がございましてな。どうやら、そなたの名で動かされたそうな」

「そ、そのようなことは一向に知りません」

「番頭どの、嘉という若者を連れて長崎奉行所に出向いても良いのだぞ。あの者、それがしに命を助けられて恩義を感じておるようだ。正直になんでも話すと思うがな」

「そんた様は、脅しに見えられたか」

店じゅうの者が聞き耳を立てていた。

「有体にいえば、そうなるか」

磐音の表情は、あくまで春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄り猫のようにのどかなものだ。

「ここで申してよいか」

清蔵は磐音を睨んでいたが、

「言いなされ」

と声を潜めた。磐音も小さな声で、

「ちょと事情が生じてな、四百両を都合してもらいたい」

「なにを阿呆らしいことを」

「町奉行所に参ってもよいのだぞ。番頭どの、ともあれ、次太夫どのと相談してこられよ」

清蔵はしばらくじっとしていたが、ふいに立ち上がった。

禅宗臨済派東明山興福寺は、長崎の人々には南京寺として親しまれてきた。

元和六年に渡来してきた真円が、元和九年に開祖したとされる。

『長崎誌』の寺院開祖の部にも、

「……元和六年、唐僧真円当表に渡り来たり、三カ年の間に、今の興福寺の境内に庵を結び住居せり、其頃邪宗門ご禁制厳萬なりし時節、日本渡海唐人の内、天主耶蘇教を信敬する者混し来る由風聞専らなりし故、南京方の船主共相議し、唐船入津の最初に、天主教を尊信させるや否やの事を、緊しく穿鑿遂け、且つ海上往来平安の祈願……」

と淵源を記してある。

風頭山の南麓にある境内は、五千九十四坪と広いものだ。

九つの時鐘が余韻を引いて消えていこうとする刻限、磐音は南京櫨が美しい山門を潜った。

西国屋の番頭清蔵は、主の次太夫に相談すべく店の奥に入り、四半刻も戻ってこなかった。が、顔を引き攣らせて磐音の前に現れた清蔵は、

「今宵九つ、南京寺の本堂前にて所望の金子、お渡しします」

と言った。

「南京寺とな。ちと異な場所、異な刻限だが、こちらからの頼みごと、承知した」

「ただし、主が申しますには、四百両は難しい、三百両を集めるのがせいぜいかと……」

「三百両か、仕方あるまい」

磐音は、望海楼に掛け合った後に差額があれば、また考えようと思った。だが、西国屋を信用したわけではない。ともあれ、一度、様子を見てのことと思っただけだ。

南京寺の真上に雲がかかり、それが風の吹き具合で散ったが、月光が庭に落ちてきた。すると本堂の回廊に西国屋寺太夫と番頭の清蔵が立っていた。

「坂崎様、そなた様にはこの西国屋次太夫、とことんいたぶられますな」

次太夫は少しばかり痩せたようだ。

「まさかそなたにこのような無心をすることになろうとは考えも及ばなかった」

「四百両とは法外にございますよ、坂崎様」

「いくら持参したな」

「腹が冷えるほどには持参しましたが、よくよく考えればそなた様に渡す理由もなし……」

次太夫の片手が上がった。

南京寺の反り返った屋根の上から殺気が降ってきた。

矛を抱え込んだ唐人が二人、磐音の頭上に襲いかかってきた。さらに、撓る長剣を両手にした大人が、本堂の回廊から尻尾のとれた凧のようにくるくると宙に身を躍らせながら、庭に大きな弧を描いて磐音に迫ってきた。

磐音は、大人の朱色の長衣の帯が翻るのを見ながら、無銘の脇差一尺七寸三分を虚空に抛った。

脇差は、矛を抱えて屋根から飛び下りてくる一人の唐人の胸に吸い込まれ、悲鳴が上がった。

さらに磐音は備前包平二尺七寸を抜くと、もう一人の唐人から振り下ろされる矛の柄を切り飛ばした。

磐音の眼前に矛の柄だけを握った唐人が飛び下りた。

唐人は柄を磐音に向かって投げると、腰帯に差した青龍刀を抜いた。

磐音の注意はもはや眼前にはなかった。

大きな円弧を描きつつ、くるりくるりと回転して迫り来る大人の長剣の舞に移っていた。

磐音は、大きな円弧の内側を大人とは反対に走りつつ、ひらひらと舞いながら振り下ろされてきた剣先に包平を合わせた。

強く弾けば撓る剣の切っ先が磐音の身に届き、斬り付けられる。

真綿で包むように合わせながら引き付けて躱すと、もう一本の長剣が襲いかかるところを叩いた。切っ先が斬り飛んだ。

一瞬の離合の中でそれは行われた。

両手に握っていた長剣が切り飛ばされたせいで、大人の舞の均衡が崩れた。大人は切られた長剣を捨てて、態勢を立て直そうと地表から虚空へと飛んだ。

磐音も停止して反転すると、大人の着地点に入り込んだ。

虚空から長剣が撓り落ちてきた。

同時に磐音の背後から青龍刀が襲ってきた。

蛇が鎌首をもたげて獲物を狙うように、撓った剣先が磐音の額に迫った。

そのとき、磐音の身体は思いがけない動きをとった。

磐音は気配も見せずに両膝の力を抜いた。

上体がふわりと後方に倒れ込んだ。

撓った長剣が、青龍刀を構えて磐音の背後に迫った唐人の顔面を弾き切り、絶叫が上がった。

それにも構わず着地した大人は、上体を反らして避けた磐音に再び襲いかかろうとした。

その瞬間、大人は両膝にひやりとした激痛を感じた。

天地がぐらりと歪んだ。

六尺豊かな大人は崩れる風景の中で自分の両足を見た。

寝そべったままの磐音の包平が地表を這い上がって、大人の両膝を斜め上へと斬り上げていた。

異国の言葉が吐かれた。

体温が一瞬の内に下がり、地表に転がったとき、大人は死の世界の入り口にいた。

「わわあっ」

と叫んだのは興福寺の回廊に立っていた清蔵だ。

次太夫はゆらりと起きてきた磐音を、がたがた身を震わせながら黙視していた。

「そなたらが下手な細工をいたすによって、あたら三人の唐人が死ぬことになった」

「来るな、近付くな」

次太夫は震える声で叫ぶと懐の金袋を投げた。

袋は磐音の足元にどさりと重く落ちた。

「来るな、来るな」

次太夫が叫び続けながら興福寺の壁に背中をぶつけた。

磐音は足元の金袋を掴んだ。